

廃炉・汚染水・処理水対策チーム会合 第149回事務局会議 議事概要

日時: 2026年4月23日(木) 10:00~12:20

場所: 東京電力ホールディングス 本社 本館3階 3C 会議室

出席者:

浅間上級研究員(早大)、岡本講師(東大)、小山客員研究員(電中研)、
辻本特別対策監、宮崎審議官、八木特別対策監、加賀室長、須賀参事官、駒田企画官、水
野研究官(資工庁)
内閣府、文科省、厚労省、復興庁、NDF、東芝、日立、三菱重工、MRI、MRA、IRID、JAEA、
電中研、東電 他

1. 前回議事概要確認

- ・ 東京電力より、前回議事概要について説明があった。

2. プラントの状況

- ・ 東京電力より、プラント関連パラメータについて説明があった。

Q. 2025年度の汚染水の増加状況が60t/日で、雨が少ないこともあったが、既往最小で良
かったと思う。是非、アピールしてほしい。(東大岡本)

A. 拝承。(東電)

3. 個別分野毎の検討・実施状況

- ・ 東京電力より、これまでの一ヶ月の動きと今後一ヶ月の予定について、「中長期ロード
マップ進捗状況(概要版)」並びに以下の資料に基づき説明があった。

- ① 建屋周辺の地下水位、汚染水発生量の状況
- ② ALPS 処理水の海洋放出に係る放射線環境影響評価(運用段階: 2024年度)の評価結果に
ついて
- ③ ゼオライト土嚢等処理の進捗状況について
- ④ 2号機 PCV 内部調査・試験的取り出し作業の状況
- ⑤ 2号機 既設原子炉水位計配管を活用したRPV内部調査について
- ⑥ 3号機 原子炉建屋内のドローン調査の結果について
- ⑦ 増設雑固体廃棄物焼却設備 施設復旧に向けた進捗状況について
- ⑧ 廃炉研究開発連携会議(第14回)の開催について(報告)
- ⑨ RFIの事前告知について

- ・ 質疑応答における主なやりとりは以下の通り。

<建屋周辺の地下水位、汚染水発生量の状況>

Q. どういうメカニズムで汚染水発生量が低減できているかを見える化できており、わかりやすかった。完璧にわかったわけではないが、どこまでわかっていて、どういうふうに考えるのか基本的な考えを理解できた。雨による影響が限定的になり、対策の効果が出たと思う。地震があったが起こった場合、建屋の流入量に変化したことはあったか。地下の状況が変わると、止まっていたところがあいたり、あいているところがあったりするのと思ったので気になった。建屋流入量が減っていて良いが、目標としてはどこまで下げれば目標を達成と言えるのか。(早大浅間)

A. 地震については、震度6の地震が2021年2月と2022年3月の2回あり、対策を行ってきたが、その時は明瞭なサブドレンや建屋流入量に変化はなかった。外側の地下水は動いていたが、1m程度と思う。地下水は下げているので、建屋内に影響はなかったが、外側では少し影響があったかもしれない。さらに強い地震に対して、ギャップ止水を見ていく必要がある。先日の震度2、3程度では影響なかった。今後の目標だが、定めるのが難しいが、元々、ギャップ止水が効けば、50 m³/日くらいいければ良い。目先の2、3年で言えば、50m³/日を切るということであれば、建屋流入量を3,000m³~5,000m³へ下げていきたい。①や②をいかに下げるかについて、定量的にデータを持っていない。処理水放出は年間7,000m³~8,000m³くらいなので、①と②は年間1回分を目指さないといけない。放出ありきで整理するものではないと思うので、新たな対策を考えて行かなければならないと思う。1号機大型カバーの効果のデータが入っていないので、どこをどう対策するかはデータを見ながら考えたい。(東電)

Q. 無限に作業することになるようだと目標として意味がない。放出しているのだから、ここまで下げればよしとするような戦略を立てると良い。(早大浅間)

A. 拝承。(東電)

Q. 汚染水発生量が減っていて素晴らしい。P7のところ、雨が降らなくても切片が定常的にあり、主にP16で全体のトレンドを見ているところの基本的なところと思う。P17の山側から流れてきている地下水が切片と思う。ここを減らさないといけないと思う。特に、3号機周りではないかと理解した。凍土壁があれば水は入ってこないが、穴が空いているところがあるので、ある程度流れてきていると思う。K排水路が凍土壁を跨いでいて、仕方ないところもあるが、凍土壁のバージョンアップやいつまで維持して使っていくのか、凍土壁のリプレイスを含めどう考えているのか。何か検討していることがあれば将来計画を含め教えてほしい。(東大岡本)

A. 切片については、ここ4、5年を各号機について細かく見たが、思ったよりバラつきが多かった。1号機だと2021年2月の地震で、PCV水位が下がり、炉注量が40m³/日から90~100m³/日まで増やした際に見かけ上の建屋流入量がマイナスになったこともあった。落ち着いたところの2025年の切片で言うと、25~30m³/日となる。そのうち、1号機、2号機、3号機の原子炉建屋が10~15 m³/日を占めている。残りの10~10数 m³/日というのは、4号機が6~7 m³/日、3号機が5~6 m³/日、1、2号機が1~2 m³/日となる。4号機のギャップ止水箇所は残り1箇所になるので、これで止まらなければ5~6 m³/日は減らないので建屋のどの方角から入ってきているのかわかれば攻め所がわかる。ドローン等で壁及び床の水の流れを可視できるかどうか、見えない場合は底盤からきているのかということから追加の調査をしていくことが目標となる。凍土壁については2028年にどのような状態になるかわかるとは思うが、まだ公表できるものはなく、解析的なところを行っている。ブラインが止まった際は、どの程度温度上昇があるのか、そうなった場合にどのような設備が追加で必要になるのか、代替する壁はどうするかを考えるものと思う。安定的な施策として将来的には何ら

かの壁は必要と思う。現場の方では、漏えい等が落ち着いて、予防保全に取り組んでいるところで見せるものがないが、陸側遮水壁をどうするかは相談させてほしい。(東電)

Q. 凍土壁の設計寿命はどれくらいか。(東大岡本)

A. 設計自体は6~7年で部品は全て交換済みである。凍結機は、重故障が起きているわけではない。外に出してメンテナンスをしているので、今すぐに何かあるわけではない。凍結管については、肉厚を見ると母材自体は15年以上もつが、ジョイント部はそこまでではない。2030年代にはリプレース等の何らかの議論があるのではないか。(東電)

Q. 凍土壁であれば土木工事になるので、時間がかかる。デッドラインがあるのであればそれを見据えて検討してほしい。(東大岡本)

A. 拝承。(東電)

Q. これまでの対策効果について全体的に詳しく説明してもらった。P15に、1~4号機の建屋流入量の推移があったが、事故後から水との戦いで時間がかかったが効果があったことを明快にしている。一つの対策では効果はせず、様々な対策で地味な作業だが効果が出ており感服している。P8のフェーシングの現状で記載があるが、白いところを今後もやっていくということで良いか。(電中研小山)

A. ここのフェーシングを行うか決めきれないが、1号機はやり始めてから数年かかることもあり、3、4号機の間は、排気筒及び開閉所等は今後のデブリの取り出しの増設建屋をどこに建てるのか等ヤード利用を含めながら検討する必要がある。他の白抜きについては様々な配管やケーブルがある。データを見ながら雨によって増加する建屋周りを優先し、他の主管と調整して少しずつ進めていくのが現状。(東電)

Q. 地道だが、ぜひ進めてほしい。(電中研小山)

A. 拝承。(東電)

<ALPS 処理水の海洋放出に係る放射線環境影響評価(運用段階:2024年度)の評価結果について>

Q. ソースタームごとに比較し、P19、P20でまとめているが、C14は厳しいと思う。ソースタームごとの内訳の議論はしているのか。ヨウ素も効いてくると思う。ソースタームを分けているので何が効いているのか教えてほしい。海外の運転中のプラントではしっかりやっているの、同等のやり方をしていると思うが、それとの同等の評価があるといい。(東大岡本)

A. 人の被ばくの核種別の内訳を記載している。結果を見ると、長半減期のヨウ素、炭素で、鉄55が一番効く核種となっている。鉄55は、測定が難しいこともあり、検出下限値が高めであり、予測評価を行う際は検出下限値があるものと評価している。濃縮係数が高い核種でもあるので、鉄55が一番効いている。P5~P7の動植物も記載していて、コバルトが大きく効いていて、同様に鉄やセリウム等の外部被ばくに効くものが入っており、かつ、海底土にくっつきやすいものが評価上、上位にきている。検出核種の扱いについては今後どうするか検討したい。(東電)

Q. 放射線環境影響評価について毎年実績値として評価するということが、処理水放出についての理解促進になるので重要と思う。P21で、実際にどれくらいの被ばく線量になるか評価する際に、魚類からくる被ばくが大きいのでこの濃度が効くと思う。年間平均を取る際に、海中のトリチウム濃度は、放出直後は上がりその後は下がるが、モニタリングのデータを見ると、放出時にデータが多く、上手く平均化できているのか。放出していない時も定期的にモニタリングを行い平均しているのか。(電中研小山)

A. P21のグラフだが、モニタリングデータをプロットしたもの。頻度が必ずしも同じではなく、検出下限値も違うものが混ざっている状況。現在は、傾向的に結果をプロットして放出期間と

並べて傾向分析的な話にとどまっている。データが蓄積されれば統計的な検討ができるのでやっていきたい。(東電)

Q. 年間平均で 1Bq/L 以下である事の説明ロジックが成り立つように注意して欲しい。(電中研 小山)

A. 拝承。(東電)

<ゼオライト土嚢等処理の進捗状況について>

Q. 非常に大変なプロジェクト。ROV の入れ替えを行ったようだが、2 台あるが劣化したから入れ替えたのか、それともそれぞれ機能が違い、作業が進んだから入れ替えたのか。満身創痍という話があったが、どのような性能劣化があったのか具体的に聞きたい。車輪とかに様々なものが付着し動きにくくなったのか。それとも、吸引の性能も落ちたのか。動画がありわかりやすかった。左下の動画でチラチラと映っていたノイズは放射線の影響と思う。カメラ位置の放射線量の推定ができると思ったが、そういったことはやっているのか。ロボットが、どのような放射線環境下で作業しているのか教えてほしい。線量の評価をしていて、すべて回収した場合等あったが、どれくらい下がれば目標達成なのか。床面一面に 1mm 程度であれば、合計で 10mSv/h くらいであれば十分と考えれば良いのか。判定基準を教えてください。(早大浅間)

A. ROV 交換は、P3 に右下の記載のとおりで、同じものに交換した。目安として、電子機器類が弱いので、上部に配置し、かつ、遮蔽しているが、遮蔽の内側で 100Gy に至る前に交換した方がいいのでその目安で交換した。異物が車輪に挟まり動きにくくなっただけであり、吸引力は変わっていない。異物がしっかりしていたので、吸引ノズルに来るのもあるが、ストレーナーもあり、補助 ROV で取り除くこともできるので問題ない。車輪に挟まった異物については、モックアップは長く行っていたが、500Gy 照射したものはここまで挟まることはなかった。現場ではここまで挟まると想定していなかったもので、知見として捉え、次に反映したい。カメラのノイズによる線量推定については評価していないが、以前の調査で測ったことがある。ゼオライトの表面で数 Sv/h 級になるが、水中で少し離れると数百 mSv/h 程度になる。目標については、基本的には 10mSv/h である。床から開口部に来る線量で考えているが、過去の 1~4 号機タービン建屋の露出をした際に線量が上がった。その時と同程度であれば大丈夫だと思っており、最大でも 20mSv/h 程度であれば過去の範囲内と思っている。実力では、0~1mSv/h まで追い込めると思うので、そこを目指して作業を行いたい。(東電)

Q. 電子機器類の故障を考え、累積が 100Gy くらいまで使い交換しているとわかったが、100Gy まで累積したのはどう判定しているのか。線量が測れていれば、電子機器が累積でどれだけ被ばくしたかわかる。電子機器の累積被爆線量はどのように判定しているのか。(早大浅間)

A. 累積線量は、中に線量計があり表示される。それを見て判断している。(東電)

Q. 素晴らしい成果と思う。集積ロボットはメンテナンスして再利用するのか。今回、照明にゴミが付いたが、水中で水を噴射して取り除く等メンテナンスについて考えていることはあるのか。今後、デブリ取り出し等でバージョンアップする際は、水中で遠隔でメンテナンスができないといけないと思う。そういったところへのインプットができるとうい。100Gy ということで、10mSv/h で 1 万時間、もっと線量は高いかもしれないので 4、5 か月もちそうだったが、予防的に 100Gy で取り出しているのか。電子機器が使えなくなった際のバックアップの方法があるのか。どのような設計になっているのか。ドライアップが目的で、わずかに残っても問題ないと思うが、タービン建屋をドライアップした時の実績、その後の除染の効果の実績等を将来のドライアップを見据えて、タービン建屋や 4 号機の事例から、底に溜まったダストの

影響をある程度評価しているのか。または、今後行うのか。今回の結果を見ると、空間線量率は10mSv/hあるので、これに近づければいいということだが、微粒子が溜まっていることもあり、過去のドライアップの事例からフィードバックをお願いしたい。(東大岡本)

- A. 照明の前にゴミがあれば引き上げて取るということも考えていたが、累積値も近いこともあったので交換となった。予防的な面で交換をしている。次の容器封入作業では、カメラの交換を簡易的にできるようにしようと思うが、基本的には地上に上げてから交換することを考えている。水中には異物があるので、それを回避して交換することは難しいが、水中でできた方が手取り早いので検討したい。タービン建屋の床面上のスラッジ処理状況については、ダスト濃度に有意な上昇はない。要因としては、地下水等が若干入っており、まだ湿気がありダスト濃度が上昇していない。万が一のために、開口部に養生をして広がらないようにしていることを確認している。スラッジ等の回収については、高線量環境下であるので遠隔で取るのか等、高線量なので現場状況を確認してどんなことができるのか確認しているところ。将来的にどうするのか決まったらまた共有したい。(東電)
- C. ロボットについては、今回はこれで問題ないが、今後メンテナンスを行う必要がある。簡単なものは交換でいいが、是非、メンテナンスのことをしっかり考え次のロボットに反映してほしい。ドライアップし、空気が動かない状態でダストモニタを行いそのままにして管理していると理解した。重要度は低くなるが、将来的に、こういう建屋や地下、場合によっては高レベル廃棄物の中間置き場でも使えるので、どのように管理していくかは長期的に検討していくものと理解した。(東大岡本)
- Q. 難しいことを実施したものと思う。ほぼほぼ上手くいったと理解した。容器封入作業が難しいと思うが、今回の結果をよく見て反映することが大事。ゼオライト粉末が細かくなって、ずっと浮遊してしまうことを懸念していた。集積ができたということでゼオライトは扱いやすいものと分かった。土嚢の切れ端がまだ残っているので、次の計画に備えてほしい。(電中研小山)
- A. 次の封入作業の方が、難易度が高いが、今回の集積作業を長くやったので、得られた知見があるので次の作業に反映したい。ゼオライトを粉々にしてしまう懸念だが、モックアップでも検証したが、これくらいであれば崩れないことを確認している。容器封入作業でもゼオライトを壊さないポンプ等を選定しているので、細粒化されてしまうことは、設計上ないと思う。(東電)

<2号機 PCV 内部調査・試験的取り出し作業の状況>

- Q. 大変期待している。試験的取り出しを行っている最中に地震があった場合が心配である。想定していると思うが、オペレーション中に今回の地震と同規模の地震が起こった場合、どのようなことが起こるのか、アームがどのような挙動をするのか、その場合の対策やマニュアル、訓練等を行っているのかわかれば教えて欲しい。(早大浅間)
- A. 耐震という観点で言うと、エンクロージャを X-6 ペネに把持するが、エンクロージャは床面にアンカーを打設し固定する。バウンダリ確保という観点で耐震設計を行っている。その上で、ロボットアームの挙動という観点で、アームを伸ばし切った状態で地震があった場合の解析を行っている。半年程度の作業になるので、夜間は作業を行わない体制になる。運用面になるが、アクセスルート構築作業では、X-6 ペネを出たところで CRD を切断する等、ペDESTAL 外側の作業では、日々ロボットアームをエンクロージャに格納し、隔離弁を閉めて作業を終える。ペDESTAL の内部までアームを伸ばしている状態で、エンクロージャに戻していると余計な時間がかかるので、作業終了後に、ペDESTAL の外のところに、アームを伸ばした状態で置く等、運用面で日々のアームの体勢をどうするか考えている。オペレーシ

ンの中で、地震を受け、仮に関節が故障した場合でも、非常時の回収手段を櫛葉のモックアップで確認している。取りまとめた上で現場作業を行いたい。(東電)

Q. 片持ちの状態なので、地震があった際に動き、周囲にぶつかりアームが壊れることを気にしている。バックホウ等は、先端を地面に置きそのままにする。そうすることで、両持ちで置かれているので揺れなくなる。地震が起きても、揺れてぶつかるようなことがないようにしてほしい。(早大浅間)

A. 拝承。(東電)

Q. 安全第一で進めてほしい。被ばく量が気になる。どれくらいの被ばくになるのか。今回は、作業場所での被ばく量が積算される。スケジュールが点線になっていて、点線が伸びると被ばく量が増える。被ばくの管理について気になったので、マネジメントしてほしい。(東大岡本)

A. 現場の作業員の方の被ばく管理は重量。日々の被ばくの実績や、作業を進める中で計画より想定が多ければ立ち止まって手順等含め確認する。(東電)

Q. 被ばく量が気になる。計画との違いももちろんだが、工程が伸び続けると、途中であきらめることになるイメージもあるので、是非、成果は期待をするが、総合的に判断する際に被ばくという観点について考えてほしい。(東大岡本)

A. 線量管理については、気にしてしっかり行っている。ALARA 会議等で、どういうやり方をするかしっかり管理していきたい。一番悩ましいのは、アーム自体は遠隔なのでいいが、現場の据え付けやトラブルの際は人が行くのが現状。ロボットを使って据え付け等を行うことを今から検討していかないと、将来のデブリ取り出しについてはできないと思うので、先生方にアドバイスをいただきたいので、また相談させてほしい。(東電)

Q. 慣れている方の線量がどんどん累積すると思うので、人材の配置等も含めお願いしたい。ロボットによる機器の設置の話は極めて重要である。ロボットで設置を行うことは、重要になるので英知事業やフロンティア枠等様々な仕組みを活用しながらできたら良いと思う。(東大岡本)

A. しっかり検討したい。(資工庁)

Q. P3 に結露対策で写真があるが、コネクタを見るとよく使われるもので、マニピュレータで抜き差しできる構造であり、運転中にトラブルがあった際に抜き差しすることもあると思う。そういった場合に、コーキングをもう一度塗ることは難しいと思うので、どうするか考えておいた方がよい。(電中研小山)

A. 今回の問題が生じたコネクタは、写真のとおり、エンクロージャ内外を繋ぐコネクタである。ここについては、作業を始めると抜き差ししなくなる箇所であるため、今回、コーキングで固め防水性を確保した。(東電)

<2号機 既設原子炉水位計装配管を活用した RPV 内部調査について>

Q. 新しい成果と思う。RPV の中を見れたということは大きな一歩である。説明を聞く限り何も問題なく調査ができたようだが、苦労等は無かったのか。挿入する際に工夫をしたことと思うので、教えて欲しい。困難やトラブルは無かったのか。成果としては大変良かった。異常がなく、内部がよく見れた。動画あれば見たい。挿入している最中の動画の方が、情報量が多いと思う。(早大浅間)

A. 2日間かけて到達したが、本来であれば半日程度で到達予定であった。既設の配管のエルボ箇所は 90° で、4、5 箇所あり進まなくなったこともあった。事前に習熟訓練を何度も行い、本番に臨んだが、そういったトラブルがあった。作業員の技量で、上手く入れるための操作を試行錯誤した。何とか 2 日目で到達できた。ノズルに到達してから RPV 内の調査に

入ろうとした際に、カメラのレンズに歪みのようなものが出た。その点についてはメーカーで原因を調査している。動画については、歪んだ映像を処理して準備している。そういったトラブルがあった。(東電)

Q. 苦労があったようなので、その情報が重要。今回の調査はオペレータのスキルで切り抜けたようだが、どのようなスキルだったのか、今後オペレーションを行う人にスキルを伝え、後々の方がスキルを学べるようにして欲しい。(早大浅間)

A. 拝承。(東電)

Q. ファイバースコープを入れられたことは素晴らしい成果。是非、動画を見たい。線量率が測れているが、40年近く運転した場合のシュラウドの放射化は運転の履歴からある程度推定できるので、炉心が溶けていない、シュラウドを入れた場合のバックグラウンドはどのくらいか。もともと Gy/h レベルの線量率なのか。バックグラウンドと比較して大きい値と理解しているが、コバルトというよりかはセシウムの影響になると思うので、バックグラウンドの情報も教えて欲しい。胃カメラであれば、悪い細胞をカットしてサンプルを持ってこれると思うが、先端に水が残っているということなので、水をサンプルして分析し、中にどんなもの残っているか、デブリのようなものがあった場合、反対側が溶けているという情報になるので、今後分析を検討して欲しい。長い距離を走っているの、カメラ先端のスミヤ測定をすれば、ある程度水の情報を推定できると思うので、回収したカメラのスミヤ測定含め検討して欲しい。(東大岡本)

A. シュラウドの線量率については、詳細は、今後評価したい。震災前のシュラウド交換前の値なのできちんとした評価にはならないが、3号機のシュラウド交換前の数値は上部格子板のところで2.2K Gyであった。コバルトの含有率は最新のものと異なっているため、直接評価には使えないが、今後詳細を評価したい。サンプルの採取については、先端に線量計を内蔵していたので、サンプルする機構はなかった。炉内から異物を外に持ち出さないということで、ファイバースコープ先端は線量測定やスミヤ採取を実施した。中のものを取ってきたような線量ではなかった。先端に何か付いていることはなかった。(東電)

C. 2K Gy ということで3桁違う。0m、1mのあたりに上部格子板があるので、その下まで落ちているのかわからない。シュラウドの線量だけでも良いと思ったが、中の線量が高いので、シミュレーションをしながら、情報がわかるという良いと思った。非常に重要なデータなので、しっかり吟味してほしい。(東大岡本)

<3号機 原子炉建屋内のドローン調査の結果について>

Q. 調査が順調に行えてよく内部の状態を確認することができたと思う。内部の状況を確認できたので良かったと思う。動画があれば見たい。可能であれば公開して欲しい。(早大浅間)

A. 建屋内の調査映像を出せるように準備したい。(東電)

Q. デブリアイ等のツールがあるので、それらに情報をマージし、CADデータと変わっていないということだが、現状の情報を3D化してほしい。3階の白い箇所は、水素爆発でコンクリートが飛んできたからと思ったが、場合によっては、高温の影響を受けた場合に鉄等の様々な材料の色が変わることは、通常のプラントでも経験している。画像情報から何が起きていたのか分析をお願いしたい。バルブを閉めるのは、可能であれば、大きめのドローンや複数のドローンを使えばトルクも発生できるのでそういった方法、もしくは、ドローンでトルクを発生できる機材を運ぶ等、遠隔操作のやり方についても検討してほしい。今回、RFIについての説明もあるが、人に代わってロボットがやるという一つの題材としても面白いと思う。現実的には、充填材や凍結といった手法をとらざるを得ないと思うが、数年後にはドローンが行って閉められようになればいいので、RFIの中に入れてほしい。(東大岡本)

- A. 1号機の時も同じだが、3号機も点群化については進めたい。画像から得られた詳細分析も今後実施していきたい。ペイロードが足りず、画像程度しか取得できなかったが、線量計を搭載し調査を行うことや、実際のバウンダリ構築作業をドローンで行う等幅を広げていきたい。(東電)
- Q. 建屋内の点群化の話があったが、点群化する際に AI を使い見えないところを含めてモデルを作ることが進んでいる。英知事業でも、いくつか行っているのも、もし、機会があれば情報交換させてもらい、反映して欲しい。(電中研小山)
- A. 点群化する際には、ドローンが見える範囲でしか点群化できない。ドローンが入れない機器の裏側や入り組んだところについては点群化で課題になっている。元々の既設の図面やCAD図があれば情報を補っているが、現場のとおりになっていないところが多いので、英知事業と連携してやらせてほしい。(東電)

<増設雑固体廃棄物焼却設備 施設復旧に向けた進捗状況について>

- Q. 再発防止対策をとり、チップの発酵や発熱は起こりにくくなっていると思うが、再度同じことが起こる可能性があるのも、内部の状態をモニタリングしながらオペレータの人がどのように止めるのか等、然るべきオペレーションができるようにマニュアルの制定や訓練がされているのか確認したい。(早大浅間)
- A. 再発防止対策については、ピットにチップを1日分しか貯めない、なるべくピットの端まで回収することを主眼にしている。再発リスクはゼロにはできないので、温度のモニタリング、温度上昇時の散水設備の設置工事を進めている。設備の運転手順や判断基準を並行して作っている。今回の事案の反省として、リスクについて、オペレータに十分引き継がれていなかったことがあったので、手順等を作成し、教育、周知、訓練した上で運転を再開したい。(東電)
- Q. ハードの対策もあったが、マネジメントの対策が一番大事と思うので、最大何日しかチップを置いてはいけない等改善してほしい。おそらく、24時間稼働すると思うので、安全管理の問題をしっかりとしてほしい。マニュアルにないようなトラブルが起きた時にどう対処するかであると思うので、他の焼却炉の先例や焼却炉で働いていた人を入れる等含め、安全第一で進めて欲しい。(東大岡本)
- A. 今後は、施設の運転範囲にとどまらず、焼却炉に焼却対象物を持ってくる人とも連携してしっかりと行いたい。運転再開にあたっては、焼却という分野では、福島第一原子力発電所の人間では精通しきれていないこともあるので、安全に運転できるように、焼却炉の運転に経験がある方にアドバイスをもらえるように調整している。(東電)

以上